⑨ 鼻くそ重太夫

今も、鮎川（旧大塔村）では、「こんなん、鼻くそや」ということばが人びとに使われています。

これは、撫養重作（重太夫ともいう）さんの口ぐせに使われていたことばなのです。

天保三年（一八三二・江戸時代）には、各地で日照りがつづき、農作物ができず食物が不足して、人びとの暮らしは、たいへん苦しいものでした。

鮎川でも、射場、下平の水田のほとんどは、大きな地割れができ、稲は枯れて収穫ができないありさまでした。こんな年が数年近くつづきました。このため、人びとは、山芋や木の根を食べて飢えをしのいだ

ほどでした。
重太夫は、この悲惨なありさまを見て、
「天水（雨水）にばかりたよっていては、いつまでたっても干害の責め苦から抜け出せない。きっと灌漑用水路を作ってみせる。」
と、決心しました。
重太夫の計画は、約三キロあまり離れた赤木の千合谷から、山すそに溝をほって、谷川の水を取り入れようというものでした。
当時は、今のように機械もなく、工事の技術も進んでいませんでしたので、重太夫の計画を聞いた村人たちは、
「あんな遠くから溝を作って、水など引けるものか。ばかばかしいにもほどがある。」
と、頭から相談にのろうとしませんでした。そればかりか、重太夫のことを変人よばわりするものまで出はじめました。けれども重太夫は、

「農民を救うには用水路作りよりほかにない。」

「一人でも、やってみせる。」

と、かたく心にちかいました。その日から、彼の苦心がはじまりました。

せせら笑う村人たちに、重太夫は、

「こんな仕事は鼻くそほどもない。」

「鼻くそほどのことが、なぜおかしい。」

と、鼻歌まじりに口ずさみながら、仕事をつづけました。

半年過ぎても、工事はいっこうに進みませんでした。無理してやとった人夫たちも、しだいに重太夫から離れていきました。村人の中には、相手にしない人や、冷たい目で見る人さえ出てきました。それでも重太

夫は、

「何くそ、これくらいのこと、鼻くそや。」

と、一人でがんばりつづけました。

天保十年、重太夫二十八歳のとき、苦心の末、ようやく用水路が完成し、清い水が、月の光にキラキラ輝きながら、勢いよく水田にそそぎこまれたとき、村人たちの態度は一変しました。

きりっと口をむすんだ重太夫は、涙をうかべながら、人びとに笑みを送りました。

測量技術の進歩していないころなの

に、溝の道筋はきちんと整い、余分な水は、ため池に集まるようにさえなっている技術を見て、

「重太夫さんは、若いのに、何とえらい人やのう。」

「ほんまにまあ、ありがたいことやのう。」

と、ほめちぎりました。それでも、重太夫はいばりもせず、

「何の、鼻くそ。」

と、つぶやくように言いました。

このおかげで、この地は、今でもどんな干ばつにも少しもひるむことなく、米作一等地として、村の宝庫になっています。

村の記録では、重太夫さんは、明治になって、住居を下平に移し、この地を重太夫平と呼ぶようになったそうです。また、用水路は、明治七年、水源地を水の多い上流の下津谷まで延長され、喜びにわいた村のようすがしのばれます。